法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-08

<資料紹介>英国におけるオーラルヒストリー(5) : Scottish Oral History Centreの活動

UMEZAKI, Osamu / 梅崎, 修

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
生涯学習とキャリアデザイン : 法政大学キャリアデザイン学会紀要 = Lifelong learning and career studies
(巻 / Volume)
15
(号 / Number)
1
(開始ページ / Start Page)
213
(終了ページ / End Page)
222
(発行年 / Year)
2017-11

〈資料紹介〉

英国におけるオーラルヒストリー（5）
―Scottish Oral History Centreの活動

法政大学キャリアデザイン学部教授　梅崎　修

1．はじめに

本稿は、英国における労働史オーラルヒストリー・センターについて紹介する。既に梅崎（2014）では、英国におけるフリーランスのオーラルヒストリアンたちの活動を、梅崎（2015a）では、ロンドン博物館（Museum of London）や大英図書館（British Library）の活動を紹介した。これらの報告は、2013年4月より2014年3月まで大学の在外研究制度を利用して英国ロンドンに滞在中に行われた視察の報告である。

さらに、梅崎（2015b）では、London Metropolitan University の図書館に設置されている TUC Library の Britain at Work：Voices from the Workplace 1945-1995の資料紹介を、梅崎（2016a）では、Westminster Business School（WBS）と University of Westminster の School of Architecture and the Built Environment（SABE）の共同プロジェクトである、Centre for the Study of the Production of the Built Environment（ProBE）の視察報告を行った。

英国におけるオーラルヒストリーの視察報告を続けている理由は、上記の先行文献でも繰り返し述べてきたが、本稿から読み始める人がほとんどであると思うので、再度ここに記しておく。

英国は米国と並んでオーラルヒストリーの先進地域である。数回の調査報告だけで英国における多様なオーラルヒストリーの研究や活動を紹介することはできない。研究の紹介に関しては、トンプソンの主著『記憶から歴史へ―オーラルヒストリーの世界』（Thompson, 2000）が翻訳され、酒井（2008）のような日本語テキストも刊行されて日本の研究者にもその全体像が明らかになってきた。しかし、大学や博物館などのオーラルヒストリーの収集・整理・展示については十分に紹介されているとは言い難い。海外のオーラルヒストリーの紹介に関しては、私が研究仲間の田口和雄氏と行った、米国におけるオーラルヒストリー・センターの紹介がある（梅崎・田口（2012, 2013, 2014）、田口・梅崎（2012, 2013a, 2013b, 2014））。しかし、英国に関しては情報が少ないと言えよう。本報告は、日本においてオーラルヒストリーに取り組む人々、特に労働史研究に関心を持つ人々にとって高い情報価値があると考える。

なお、梅崎（2014, 2015ab, 2016ac）でも指摘したように、ここ10年の間、日本においても様々な学問分野でオーラルヒストリーという研究手法が広がってきた。ところが、日本のオーラルヒストリー・プロジェクトは、未だに個人レベルやチーム・レベルの取り組みに止まっているとも言える。特にオーラルヒストリーのアーカイブ化に関しては、その重要性が指摘されつつも実行するのは難しい[1)]。将来、日本においてオーラルヒストリーの収集・整理・展示が進展しなければ、オーラルヒストリーという調査が世代を超えて引き継がれることはない。言い換えれば、オーラルヒストリー

のアーカイブがあれば、調査と研究は地域や世代を超えてオーラルヒストリーの利用者に広がっていくと言えよう。

私は、2017年3月に英国グラスゴーにあるUniversity of Strathclydeに設置されているScottish Oral History Centre（SOHC）を訪問し、代表のArthur McIvor氏にインタビューを行った。氏は、大学内では人文学部（社会史分野）の教授として教鞭をとっている。

なお、Scottish Oral History Centreは、後述するようにスコットランド地域のオーラルヒストリアンのネットワークの拠点であり、オーラルヒストリー教育、オーラルヒストリー・プロジェクトの企画運営、海外との連携なども行っている。

Arthur McIvor氏は、2013年にThe TUC Library Collectionsを使ってWorking Lives: Work in Britain Since 1945, Palgrave Macmillanを刊行している（梅崎（2015b）参照）。また教授は、2000年にA History of Work in Britain, 1880-1950 (Social History in Perspective), Palgrave Macmillanを刊行している。氏は、英国労働史の著名な研究者であると言えよう。筆者の専門分野が労働史なので、オーラルヒストリー全般だけでなく、労働史に関する意見交換ができたのはうれしかった[2)]。私と同じ労働史研究者にとっても役立つ情報になれば、さらにうれしい。

Arthur McIvor氏は、とても気さくな方で、私が訪ねると、社会史分野の共同研究室、SOHC、大学図書館を案内いただき、最後には地元のパブで御馳走していただいた。この場を借りて感謝申し上げたい。

図1　Scottish Oral History CentreのWebサイト（一部）

（資料）SOHCのwebサイト

2. Scottish Oral History Centre の概要

本節では、はじめにSOHCの組織と活動を紹介しよう（図1参照）[3]。SOHCは、オーラルヒストリーの学際的な研究センターとして1995年に設置された。学術的なオーラルヒストリー研究とコミュニティ・オーラルヒストリーの知識交流の拠点であり、オーラルヒストリーの方法的可能性を幅広く議論できる場である。Arthur McIvor教授は、2005年からこのセンターの代表を務めている。

このセンターには、11名のスタッフ（関連部門所属も含む）と14名の大学院生が所属している。調査研究とともに教育、特にオーラルヒストリーの研究者養成をしている点が、このセンターの特徴である。このような教育機能が活発な研究発信を支えていると言えよう。

さらにSOHCは、University of Strathclydeの研究者や学生だけでなく、スコットランド地域にあるUniversity of GlasgowやUniversity of Edinburghなどの大学やスコットランド地域の博物館や美術館とも連携している。Arthur McIvor教授は、英国オーラルヒストリー学会（Oral History Society）でスコットランド地域の幹事を務めており、この地域のオーラルヒストリアンのまとめ役である。

次に、SOHCが力を入れている代表的取り組みとして、以下の4点があげられる。

（1）国際連携

第一に、国際連携の取り組みがあげられる。具体的には、International research history Summer Instituteという夏の短期セミナーの運営を行っている。2016年には、6月2－3日の二日間で開催された。このセミナーは、カナダ・モントリオールにあるConcordia UniversityのOral History and Digital Storytellingとの共催で、毎年行われている。2016年にはモントリオールで開催され、両センターから28名が参加し、次のテーマについて議論を行った。なお、私がSOHCを訪問した後、2017年6月にはグラスゴーでセミナーが開催されている。

- Oral History in Practice (based on the questions raised the first morning)
- Analysing Emotions and the Senses
- Narrative Analysis: Interpreting Life Stories
- Analysing Memory in Oral History Interviews
- Writing Oral History: Challenges and Opportunities
- Where is the field of Oral History headed?

（2）実践的なオーラルヒストリー教育

第二に、SOHCは、幅広い教育プログラムを用意し、地域オーラルヒストリーの支援も行っている。例えば、オーラルヒストリー未経験者に対しては、1日限りのIntroduction to Oral History Training Dayという講義をしている。午前から夕方までのオーラルヒストリー入門セミナーでは、次のような初心者向けの内容が講義される。

1. Intro to Oral History
2. Beginners Guide to Project Planning, Questionnaires and Interviewing
   （Morning break）
3. Getting Started with Digital Recorders
4. Trying it Out: Interview Practice and Discussion
   （Lunch (own arrangements)）
5. After the Interview: Safeguarding, Summarizing and Transcribing
6. Consent, Copyright and Ethics
   （Afternoon break）
7. Using Oral History Interviews
8. Review/Closing Remarks

この他にもSOHCは、スコットランド地域における各種教育機関のオーラルヒストリーやコミュニティ・オーラルヒストリーの計画に対して

は個別支援を行っている。

またSOHCは、University of Strathclydeの学部生向けにWork & Community Placement in Oral Historyという講座を設けている。この授業は、The Centre and Scottish museums and archivesとの共催授業で、歴史学を学ぶ学生はもとより学芸員を目指す多くの学生も受講している。具体的には、この授業は、スコットランド地域の各種博物館と連動しながらインタビューの方法とオーラルヒストリー・プロジェクトの運営方法を教えており、実際に受講学生たちがオーラルヒストリーを行う実践的な授業である。

続けて、授業の内容を説明しよう。最初の1－3回（3 weeks）は、大学内の教室で講義を受け、グループごとにプロジェクト企画会議を行うが、その後4－6回、8回は大学内での講義はなく実習になる。途中7回目に途中経過を報告し合い、教員からのアドバイスを受ける。さらに9回目にグループごとにプロジェクトの調査結果を発表し、教員からアドバイスを受け、10回目に再度、教員からのアドバイスを受けて実習を行い、レポートを完成させる。最後11回目は、二日分に分けて教員と調査対象者（パートナー）に向けた報告会と調査の振り返りを行う。

加えて、大学院修士レベルのOral History Theory and Practice and the Master level class Advance Oral Historyが設置されている。詳しい内容は、次に記したとおりである。

1 Course Introduction & Handbook Review
2 Theory ① What is Oral History?
3 Theory ② Understanding Memory
4 Theory ③ Subjectivity & Intersubjectivity
5 Theory ④ Legal & Ethical Responsibilities
6 Practice ① Preparing for the Interview, Using the Equipment
7 Practice ② Transcribing & Summarising
8 Practice ③ Evidence & (Reflective) Analysis
9 Practice ④ Taking Oral History Public
10 Practice ⑤ Class Presentations (optional)

この授業は、大学院レベルのオーラルヒストリーの理論、方法、知識を得ることを目的としている。インタビューや録音の方法だけでなく、口述資料をどのように分析・解釈するか、又は公共的活動や教育活動にオーラルヒストリーを役立てる方法についても講義をしている。なお、この授業も、実習を重視している。参加学生たちは、Mini Oral History Projectを企画し、インタビューに基づいたレポートを作成することが求められている。この授業の実習が、そのまま修士論文へと発展することもあろう。

（3）定期的な研究セミナー

第三に、SOHCでは、多くの研究セミナーが行われている。SOHCの所内に独自のセミナー室を設けており、その固定の場所で定期的にセミナーが行われている（図1参照）。その頻度は、月2回程度である。

Arthur McIvor教授によれば、セミナーの後には立食パーティーが行われることも多い。ワインのボトルがセミナー室の事務室においてあり、私にも交流の宴の活気を想像させてくれた。

また、このセミナー室の隣には、映像編集や文字起こしのための専用機器がおいてあり、私が訪問した際も大学院生が文字起こしを行っていた。

ところで、セミナー室では、図2に示したように、SOHCが過去に行ったオーラルヒストリー・プロジェクトやSOHCのプロジェクトから生まれた出版物が紹介されている。このようなプロジェクトの成果を常に発信しているからこそ、このセンターに研究者が集まるという構造になっていると言えよう。

2016年度は、グラスゴー大学の教員などのオーラルヒストリアンたちと共同運営している月一セミナーでは、国内外のオーラルヒストリアンによる報告が行われている。また、もう少し大規模なコンファレンスとしてConferences on Gender and DeindustrialisationやScottish Business Archivists Annual Conferenceがこのセミナールームで開催されている。Arthur McIvor教授

図1　SOHCのセミナー室

資料）筆者撮影

図2　SOHCのプロジェクト・ポスター

資料）筆者撮影

によれば、報告にも工夫が凝らされており、論文報告もあれば、語り手が登壇し、ミニ・オーラルヒストリーを会場で行うような試みもある。

なお、2017年5月には、Constructing Post-War Britain: building workers storiesというセミナーが行われているが、この内容は、梅崎（2016a）で紹介したCentre for the Study of the Production of the Built Environment（ProBE）の報告である。英国国内でも各地域のオーラルヒストリーのセンターはネットワーク化していることがわかる。

加えて、最近SOHCでは、大学院向けにOral History Postgraduate Conferenceに力を入れている。これは、国内外のオーラルヒストリーの教育機関との緊密な連携の下に運営され、他大学の院生が交流できる仕組みになっている。言い換えると、SOHCだけでは大学院生は14名なので、セミナーを恒常的に運営するには大学院生が少ないと言えよう。

（4）調査報告と出版

第四に、SOHCは、数々の調査プロジェクトを実施、もしくは支援している。具体的には、Working lives, Deindustrialisation; The social history of health and disability; Conflict, genocide and war; Gender history; Memory studies and heritage studiesなどのオーラルヒストリー・プロジェクトなどがある。

また、プロジェクトの中には、企業との連携プロジェクトもある。国際的な酒造メーカーであるDIAGEOの社員の映像オーラルヒストリーを依頼され、蒸留所でのインタビューを実施している。このDiageo Hidden Histories Projectと名付けされたプロジェクトは、企業の公式な記録からは隠されたものをオーラルヒストリーによって明らかにし、伝承するという目的を持っている。

図3に示したのは、2016年のセンターのAnnual Reportに掲載されているインタビューの風景である。大学研究者や大学院生の研究だけでは、オーラルヒストリー・センターの維持は難しいと推測される。このように幅広い対象、幅広い資金連携によってSOHCが運営されていることがわかる。

ところで、梅崎・田口（2012）でも紹介した米国・University of California Berkeley UCB）のROHO（the Regional Oral History Office）においても地元の世界的なワイン・食品産業のオーラルヒストリーがあった。これらは同じ試みであると言えよう。グローバルに売買されつつ、同時にローカル・アイデンティティの基盤である地元のお酒は、オーラルヒストリーの対象として選ばれやすいと言えるかもしれない。将来、日本におけるお酒のオーラルヒストリーの発展も期待される。

加えて、SOHCに所属している（研究協力も含む）研究者が多くのオーラルヒストリー研究の出版を行っている。Masculinities on Clydeside（Edinburgh University Press）、Men in

図 3　Diageo Hidden Histories Project の撮影風景

資料）Scottish Oral History Centre Activities, 2016報告書

Reserve: British Civilian Masculinity in the Second World War（Manchester University Press）、Selling Science: Polio and the Promise of Gamma Globulin（Rutgers University Press）などの出版物が行われ（準備中も含む）、オーラルヒストリーを使った博士論文も提出されている。

オーラルヒストリーを使った研究成果は、語りの部分の引用が多くなり、文字数が多くなるという特徴がある。それゆえ、論文の形に分量を絞るのは難しいと言えよう。だからこそ、SOHC のように本という形で研究成果を発表できること、その発表された成果を世界に向けて発信できることは、調査を続けるオーラルヒストリアンには恵まれた研究環境と考えられる。

3.　SOHC のオーラルヒストリー・アーカイブ

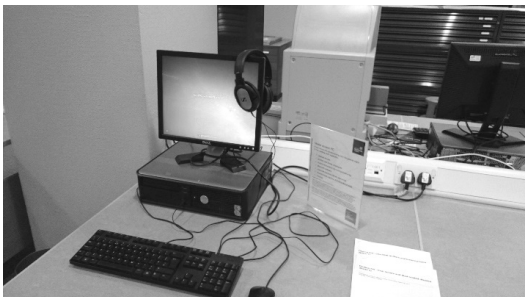
SOHC の資料としてオーラルヒストリーは、大学図書館によって管理されている。図書館内の特別資料室には、オーラルヒストリーと一緒に文書資料も保存・整理されているので、文書資料を見た後に音声データを聞くことも可能である（図4参照）。

私が、この資料室を訪ねた時は、専門スタッフが資料室を説明してくれ、音声データの利用手続きをしてくれた。音声データは、デジタル化されているので、図 5に示したように音声データ専門の PC によって聞くことが可能であり、オンライン利用も可能である。

図 4　図書館内の資料室

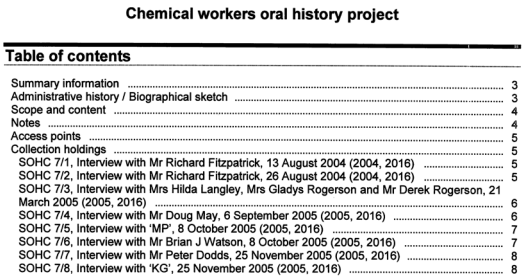
資料）筆者撮影

図５　オーラルヒストリー専用の PC



資料）筆者撮影

図６　オーラルヒストリー・コレクションの一例



Chemical workers oral history project

Table of contents

Summary information 3
Administrative history / Biographical sketch 3
Scope and content 4
Notes 4
Access points 5
Collection holdings 5
SOHC 7/1, Interview with Mr Richard Fitzpatrick, 13 August 2004 (2004, 2016) 5
SOHC 7/2, Interview with Mr Richard Fitzpatrick, 26 August 2004 (2004, 2016) 5
SOHC 7/3, Interview with Mrs Hilda Langley, Mrs Gladys Rogerson and Mr Derek Rogerson, 21 March 2005 (2005, 2016) 6
SOHC 7/4, Interview with Mr Doug May, 6 September 2005 (2005, 2016) 6
SOHC 7/5, Interview with 'MP', 8 October 2005 (2005, 2016) 7
SOHC 7/6, Interview with Mr Brian J Watson, 8 October 2005 (2005, 2016) 7
SOHC 7/7, Interview with Mr Peter Dodds, 25 November 2005 (2005, 2016) 8
SOHC 7/8, Interview with 'KG', 25 November 2005 (2005, 2016) 8

資料）Scottish Oral History Centre Activities

ただし、SOHC のオーラルヒストリーは、現在、その全てがデジタル化されているわけではなく、その作業は継続中である。外部資金を獲得しながらデジタル化の作業を大学図書館と連携しながら行っている。

私も、実際に専用 PC の前で検索作業をしてみた。まず、専用のアカウントを発行してもらう。次に、様々なコレクションの中から Chemical workers oral history project（SOHC7）を選んだ。Arthur　McIvor 氏がインタビュアーであったプロジェクトである。

このプロジェクトに関しては、図 6のような情報が提示されるので、とても便利である。なかでも Administrative history / Biographical sketch があることで、オーラルヒストリーの概略が把握できるし、Scope and content があることによって、このオーラルヒストリーにおける研究状況などがわかる。音声データに様々な検索情報や要約情報を添付することによって利便性が向上するだけでなく、歴史（資料）の見通しが広がることを感じた。この環境を見て私も、University of Strathclyde で歴史学を学ぶ大学院生たちを心底羨ましいと思った。

なお、このような利用環境の基礎には、オーラルヒストリーの著作権環境の整備がある。Recording agreement form が用意されている。

4.　モデルとなるオーラルヒストリー・センター

英国･米国において多くのオーラルヒストリー･センターを訪問してきたが、日本において同様のオーラルヒストリー・センターの設立を計画した場合、モデルとして第一に挙げられるのが SOHC であろう。米国には、SOHC よりも大きな予算で運営されている大規模なセンターもあるが、SOHC の優れている点は、研究交流と支援、教育、アーカイブ、発信力すべておいてバランスがよく、欠けている所がない。また、一大学だけでなく、スコットランド全域の大学や博物館、更には地元企業と連携している点も優れている。

オーラルヒストリーの教育プログラムを一大学だけで運営しようとしても、またセミナーを開催しようとしても、学生の数も少ないし、研究者の数も少ない。SOHC のように地域内でオーラルヒストリアンを集めていくことが必要であろう。

このようなネットワークの上に構築されているオーラルヒストリー・センターは、英国におけるオーラルヒストリー研究の蓄積、また代表である Arthur　McIvor 氏の人柄や能力によるところが大きい。ただ、それだけでなく、スコットランドという郷土愛が溢れる地域をベースにオーラルヒストリーのネットワークを構築している点も、成功の秘訣と言えるかもしれない。Arthur McIvor 氏とは、労働史やオーラルヒストリーについても意見交換をしたが、御馳走になった地元ハブでは、

スコットランド、特にグラスゴーの文化・社会的伝統の魅力について教えてもらった。その魅力の大きな部分を占めるのが労働者文化であることは言うまでもない。日本において我々が、オーラルヒストリー・センターの設置を考えられる時も、地域における文化・社会的伝統の流れの延長線上に展望したいと思う。

【謝辞】本稿は、科学研究費基盤研究（C）「労働争議の「主体」形成と文化に関する歴史的研究―近江絹糸人権争議の検討」（16K04104）の成果の一部である。ここに記して感謝申し上げる。

―― 注 ――

1）日本における労働史オーラルヒストリー・アーカイブ化の取組みとして、私が研究仲間と共同で開設した労働史オーラルヒストリー・プロジェクトのwebサイト（大阪産業労働資料館）がある。詳しくは、梅崎（2016b）を参照。（http://shaunkyo.jp/oralhistory/about.html）

2）梅崎（2007,2012,2016b）では、日本における労働史オーラルヒストリーにおける調査蓄積と方法論について議論した。

3）インタビュー調査と一緒にSOHCのAnnual Report（2016）を参考にした。（https://www.strath.ac.uk/media/departments/history/Scottish_Oral_History_Centre_2016_Report.pdf 2017年9月7日閲覧）

参考文献

梅崎修（2007）「労働研究とオーラルヒストリー」『大原社会問題研究雑誌』589, pp.17-32

――（2012）「オーラルヒストリーによって何を分析するのか―労働史における＜オーラリティー＞の可能性」『社会政策』11, pp.32-44

――（2014）「英国におけるオーラルヒストリー（1）―フリーランスのオーラルヒストリアンたちとの出会い」『生涯学習とキャリアデザイン』第12号（1）pp.123-130

――（2015a）「英国におけるオーラルヒストリー（2）―収集・整理・公開の方法」『生涯学習とキャリアデザイン』第12号（2），pp.121-130

――（2015b）「英国におけるオーラルヒストリー（3）―Britain at Work：Voices from the Workplace 1945-1995の活動」『生涯学習とキャリアデザイン』第13号No.1 pp.135-143

――（2016a）「英国におけるオーラルヒストリー（4）―Centre for the Study of the Production of the Built Environmentの活動」『生涯学習とキャリアデザイン』第13号No.2 pp. 103-109

――（2016b）「労働史オーラルヒストリー・アーカイブの試み―映像化の取り組みと資料の利用可能性を中心に」『社会政策』第7巻第3号（2016年）pp.102-112

――（2016c）「動向レビュー：英米のオーラルヒストリー・アーカイブから何を学ぶか」「カレントアウェアネス」（国会図書館）No.330, pp.21-24

梅崎修・田口和雄（2012）「Regional Oral History Office（ROHO）のオーラルヒストリー・アーカイブについて」『生涯学習とキャリアデザイン』9, pp.75-85

――・――（2013）「コロンビア大学・CCOH（Columbia Center of Oral History）におけるオーラルヒストリー調査とアーカイブについて」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』10, pp.319-338

――・――（2014）「MATRIX（The Center for Digital Humanities and Social Sciences at Michigan State University）におけるオーラルヒストリー・デジタル・アーカイブの試み」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』11, pp.279-296

酒井順子（2008）『市民のオーラル・ヒストリー―歴史を書く力を取り戻す』かわさき市民アカデミー出版部

田口和雄・梅崎修（2012）「アメリカにおけるオー

ラルヒストリー・アーカイブ化の現状について―UCLA Center for Oral History Rsearch（COHR）のインタビュー調査をもとに」『高千穂論叢』47（1）pp.99-119

――――・――（2013a）「NYU Tamiment Library & Robert F. Wagner Labor Archives におけるオーラルヒストリーのデジタル・アーカイブ化について」『高千穂論叢』47（4）pp.97-118

――――・――（2013b）「The New York Public Library for the Performing Arts and the Ellis Island Immigration Museum におけるオーラルヒストリー・プロジェクトについて」『高千穂学園創立110周年記念論文集Ⅰ』）pp.311-323

――――・――（2014）「WSU Walter P. Reuther Library and Urban Affairs におけるオーラルヒストリー・プロジェクトとアーカイブの現状について」『高千穂論叢、高千穂学園創立110周年記念論文集Ⅱ』48（3・4），pp.139-162

Paul Thompson（2000）The Voice of the Past: Oral History 3rd. ed. Oxford（酒井順子訳（2002）『記憶から歴史へ―オーラル・ヒストリーの世界』青木書店）。

Oral history in the United Kingdom (5)
—Scottish Oral History Centre

UMEZAKI Osamu

This report introduces an oral history archive in the United Kingdom (UK), a country that is advanced in the study of oral history and in related research. I visited the Scottish Oral History Centre in the UK. The staffs had knowledge on how to manage and exhibit oral documents. I interviewed a staff member of these archives and attended some exhibitions on oral history. This paper presents my report on my investigations. It is likely that this report will offer valuable information on ways of collecting, safekeeping, and exhibiting oral history, which will be useful for Japanese oral historians.